

上演2 宮城県代表
北海道芸術高等学校仙台サテライトキャンパス
作 笠木泉 潤色 北芸演劇部

講評文
山形県立山形中央高等学校 大沼環愛

この劇は命や死が大きなテーマと感じた。訴えていることが明確になっていない、非常にボヤけているのに、強いメッセージ性がある劇だった。

この劇は、女の語りから始まる。その後も演技と説明のセリフの2つで構成されていた。説明的なセリフは、舞台と観客の境界線を曖昧にしていた。境界線という面では、自由度の高い舞台だった。そのため、場面の切り替えが非常に多い劇だったが、違和感なく進んでいた。

この劇を観て、ぼんやり、漠然としているという印象を受けた。その理由として演技をしている時のセリフの抑揚が一定。ということが挙げられる。この話方が何かに似ているなと感じたが、母親の子供への読み聞かせをしている時だと気づいた。どこか非現実を感じさせ、ただフィクションの物語を読み進めている感じだ。しかし内容は現実的。更に説明のセリフの方が感情が込められていたことから、あまり非日常を感じさせない。リアルと虚構が混ぜられたような、心地良い違和感を感じた。

また、彼女らに起こった深刻な出来事が劇中で言及されていないという点も、理由の一つだと思った。福島原発事故、オーバードーズなどは、核心に迫ることのできる台詞がいくつかあったが、具体的な言及はなかった。個人的に全く想像できないものすらあった。彼女らに起こったこと、伝えたいことを永遠に、長い時間考えさせられる劇だった。

舞台は、音響照明共にあまり使用されていなく、舞台装置も少なかったため、シンプルだという印象を受けた。シンプルだったおかげで、演者の所作や、感情をダイレクトに感じることもできた。